

村上陽一郎 評

キリスト教は役に立つか

毎日 2017. 5. 28

来住英俊著(新潮選書・1404円)

本欄に取り上げようか、と本書のページを拾い読みしている私の目に、次の言葉が飛び込んできた。「死後の世界はイエスが一緒にいてくれる場所です。じんわりと涙が湧いた。それから、ほのぼのとした喜びが心を浸した。死の迫るのを自覚しながら、そのことをすっかり忘れていたな、お前は。

お前がこの言葉に感動するのは、お前が曲がりなりにもキリスト者だからだ。それはそうだ。しかし、本書の著者は、イエスを信じない人にも、同じ喜びを分かち合うことを躊躇(ちゅうちゆ)わない。死後の世界、「そこは『あの人』がいる場所だ」。

「あの人」には、亡くなった誰を入れてもよいのだ。とても直接に心に響いてくるものがありますか。私たちは、ともしれば宗教を、独善的、排他的、強圧的と感じる。今イスラム教徒のごく一部が、そういう印象を与えるように振る舞っているが、キリスト教徒もまた、そのように振る舞って来た過去があり、場合によっては今でもまた、そのように振る舞うことがある。しかし、本書で説かれる宗教、キリスト教は、まるで違う。著者の定義に聴いてみよう。「キリスト教信仰を生きているとは、人となった神、イエス・キリストと、人生の悩み・喜び・疑問を語り合いながら、ともに旅路を歩むことである」

読者と「共に歩む」姿勢

古代中国では、孔子や孟子は、為政者(せいせい)つまり君子の語り相手、一種のコンサルタントの役割を果たそうとした。本書の著者は、イエスはあたかも万人のためのコンサルタントであるかのようにだ。その意味で、キリスト教は、信者でない人々にとって「も役に立つ」のかも知れない。しかし、本書でのイエスが、孔孟と決定的に違うのは、その旅路の果てが「神の国」である、というところだろう。

結婚の意味に触れている場面も、感動を呼ぶ。司祭という立場上、チェリバトス(独身性)を護らなければならぬ著者が、真摯(まじし)に結婚と向き合っている。そのこと自体にも心を動かされるからかもしれない。本書は、聖書の言葉をはじめ、信仰に関する様々な人々によって書かれた寸言をリードに、著者がその文章と交わした短心的対話の文章によって構成されている。その結果として、ある意味では冗談でなく、人生のコンサルタント的な内容が重ねられている。ただ「コンサルタント」という言葉、ここでは自分で使い始めなければ、誤解を生じないことを願う。世俗的・功利主義的な意味、あるいは教導主義的な意味を伝えがちな言葉だからだ。ここにあるのはまるで違う意味だ。まさしく、先のキリスト教信仰の定義における、イエスの

役割に倣(なら)って、著者自身が読者と「共に歩む」相手となる、という姿勢であり、本書はその姿勢で書かれている。著者は司祭であり、司祭とはラテン語では「パター」だが、本書はパターンリズム(父権的温情主義)の対極にある。ただコンサルタントという言葉を使ったことにも理由はあろう。本書のタイトルが「キリスト教は役に立つか」となっているからだ。そう、「役に立つ」

という言葉の字面は、世俗的功利の世界を意味する。その点から言えば、本書を読み終わられた方は、キリスト教徒であろうと、なかつと、あるいはキリスト教に反感を覚える人でさえも、何かを得た、と感じるだろう。本書は確かに「役に立つ」し、それを可能にしているのは、これまで確かに著者の根本を形成するキリスト教そのものである。だから、キリスト教はやっぱり役に立つのだ。

「役に立つ」という言葉の字面は、世俗的功利の世界を意味する。その点から言えば、本書を読み終わられた方は、キリスト教徒であろうと、なかつと、あるいはキリスト教に反感を覚える人でさえも、何かを得た、と感じるだろう。本書は確かに「役に立つ」し、それを可能にしているのは、これまで確かに著者の根本を形成するキリスト教そのものである。だから、キリスト教はやっぱり役に立つのだ。